

## 中廊下型農家住宅の成立とその要因に関する実証的研究（2）

大岡 敏昭

## 序文

本研究は研究 No. 9001<sup>注1)</sup>の継続である。農家住宅における近年の中廊下型成立の問題と、その型の成立のうちに含む地域独自の特徴的平面構成（とくに座敷構成）継承の問題の解明を目的としたものであり、その研究課題は次の3点であった。

まず第1は、農家住宅における中廊下型への変化の実態を地域別、年代別に明らかにすること。そして、そのような中廊下型への変化の中においても、平面構成はその地域独自の伝統的構成を根強く継承している実態を明らかにすること。第2は、中廊下型成立および地域独自の平面構成の継承の要因とその歴史的意味を考察すること。第3は、かかる分析を基に、住宅発展における新しい型の成立のプロセスと、住生活および住空間の発展の法則性を探ること、であった。

前回の研究においては、山形県中部（鍵座敷系住宅）、福井県南部（前土間系住宅）、大分県中部（鍵座敷系と前座敷系住宅）、宮崎県山間部（併列系住宅）<sup>注2)</sup>の4つの地域を対象にして、その地域の21の市町村の家屋台帳の住宅平面9605戸を収集し分析し、中廊下型への変化の実態を明らかにした。そして、併列系住宅が分布する宮崎県五ヶ瀬町坂狩上集落を対象にして調査を行い、次の3点の知見を得た。

(1)近年における農家住宅の平面構成は、昭和40年代を境にして旧来型<sup>注3)</sup>から中廊下型へ一挙に展開している。地域的にみれば若干の差異はあるものの、その変化はどの地域もほぼ一様である。この変化の態様をみると、宮崎県山間部における昭和40年代の中廊下型への変化は、カヤから瓦への屋根替えを契機にした大規模改善によるものであった。そして昭和50年代以降に土間の床上化を伴った新築の中廊下型が一挙に普及している。また、地域独自の特徴的な平面構成はとくに座敷構成の特徴でもあるが、中廊下型への急激な変化の中においてもその特徴的形式を現在においても厳然と継承している地域が多くみられた。

(2)中廊下型成立の問題は、中廊下導入の問題と座敷構成継承の問題の両方を含んでいるが、その要因は近代的な家族観を含んだ新しい家の論理に規定されていると考えられる。中廊下の導入は、明治以降からの住宅発展に

おける寝所と茶の間の要求・拡大を基底にして、接客祭礼時における家族生活空間の確保を強く意図したものであった。このことは、家族生活重視のために住宅内における接客祭礼を問題にするという立場でなく、それを家の維持のために必要不可欠であるという命題を前提にした改善要求であり、言わば接客祭礼と家族生活の調和を強く求めたものと言える。これはまた戦前の都市住宅の中廊下型成立と異なる点でもある。その接客祭礼の象徴的空間である座敷の意味は、専用仏間のない一般農家においては仏間の側面と客間の側面の2つを内在させているが、宮崎県山間部の五ヶ瀬町においては前者の側面が強く、家族重視という近代的家族観に影響されながらも祖先信仰と家存続の象徴としての仏壇を大切に維持し、座敷はそのための重要な空間として住宅の中心に配置されていた。

(3)このような中廊下型への変化は、昭和40年代に突如として起こったのではなく、明治以降の茶の間の独立化、寝所の確保、神聖な座敷の確保、母家中央の広いオモテ空間の分割と寝所の増室、といった住宅発展の積み重ねの上に展開されており、その住法則は基本的には接客祭礼と家族生活の対立・分化の関係に求められた。

以上のように、冒頭に述べた研究課題の1については、それがほぼ全国的な傾向であることが実証されたが、2と3については、その変化および継承の要因と歴史的意味については地域性を強く含んだ問題であるが故に、さらに他の住宅型が分布する地域も取り上げる必要があった。幸いにも研究助成の継続が認められたので、前土間系の住宅が分布する福井県南部の2集落と鍵座敷系の住宅が分布する大分県中部の1集落を対象にして課題の解明を行った。調査対象地選定の理由は以下のごとくである。

中廊下型成立の問題はさらに、なぜ昭和40年代に中廊下が導入されたか、なぜ座敷空間が存続・拡充され、その地域の特徴的座敷空間が継承されるのか、それを規定する農家家族の論理は何か、の3点が分析課題となる。その視点から比較考察しやすいように、中廊下型への変化が比較的早くから進み、昭和40年代には9割近くに達している鍵座敷系住宅（大分県）と、逆に、中廊下型への変化の時期が相対的に遅く、40年代に至っても7割程

度と普及率も相対的に低い前土間系住宅（福井県）を対象にした。この前土間系とは、住宅の表の前側が土間であり、その奥が床上空間という構成である。北陸地方の特徴的な平面であるが、入口―土間―床上という空間の流れから見ると横土間型よりも自然な平面構成と言える。このような特徴的な平面の住宅に中廊下がどのようにして導入されたかは興味のあるところであった。また、前回の研究では宮崎県五ヶ瀬町を対象にして併列系住宅をみてきたが、その座敷空間の成立は、まず最初に仏間空間の確保から出発していること、その仏間の側面が強い座敷はヨコ中廊下の奥に設けられ、茶の間などの家族生活空間は中廊下の前側に設けるという特徴的な発展をしていた。これは前土間系住宅の平面原理にも通じるものがあり、しかも前土間系には仏間の側面の強い座敷をもつ住宅平面が多い。従って、座敷空間がなぜ住宅の最も奥に設けられるのかという疑問を含めて、座敷空間の存続論理を考察するには適した住宅型であると考えた。

なお調査は平成4、5年に、鍵座敷系住宅の大分県犬

飼町長谷集落（<sup>ゆうの</sup>勇野組）、前土間系住宅の福井県敦賀市越<sup>おつ</sup>坂集落と福井県今庄町<sup>やい</sup>八飯集落を対象にして住宅<sup>しつかい</sup>悉皆調査（住宅平面、住み方、住宅改善歴、集落形態など）を行った。

## 1. 鍵座敷系住宅の中廊下型成立とその要因 （大分県犬飼町長谷集落・勇野組）

### 1.1 対象集落（組）の概要と屋敷配置

長谷集落は町の中心地から約10km程の<sup>さんろく</sup>山麓地帯にある畑作中心の集落である（図1）。集落戸数45戸の規模であるが、調査はそのうち12戸で構成された勇野組を対象にした。この集落は、大分市まで車で約1時間の距離に位置するために昭和30年代から兼業化が進み、専業農家は現在2戸のみである。勇野組は現在12戸で構成されている（No. 10, 11は他の組であるが、参考のために考察に加えている）。終戦時は14戸あったが、昭和37年に2戸が離村し12戸となり、現在に至っている。組は葬儀など

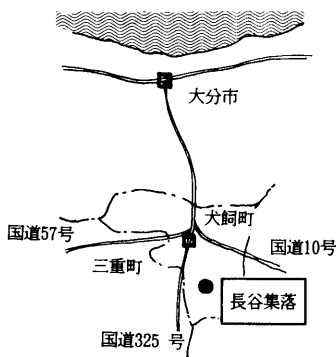


図1 長谷集落の位置

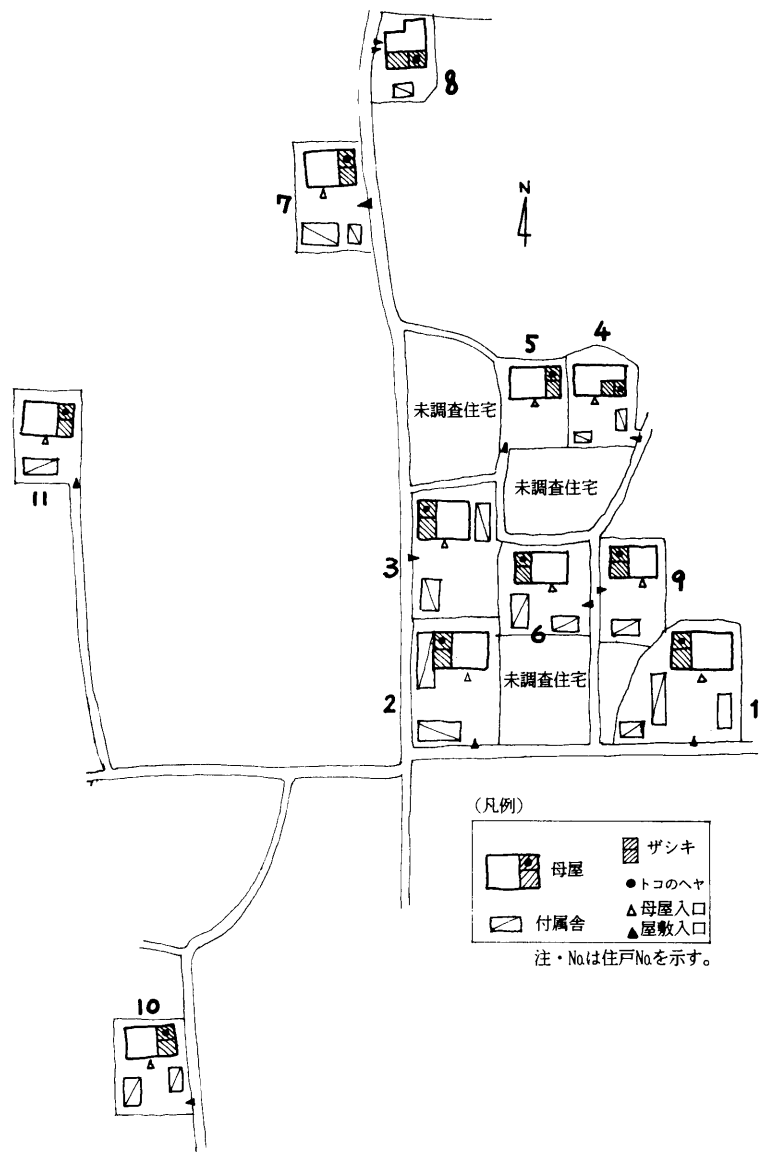


図2 長谷集落・勇野組の屋敷配置（現状）

相互扶助の単位である。戦前までの葬儀においてはその組内だけで行っていたが、昭和30年代からは集落全戸がかかわり合うようになった。接客行事の簡素化は進んだが、交流範囲は逆に拡大している。図2は集落の屋敷配置をみたものであるが、その形態は塊状村であり、屋敷は比較的広く、付属舎も多い。平地農村の典型と言える。とくに、屋敷入口がどの方位であろうと母家は北に精一杯詰め、南側を広く空け、母家へは南から入るという配置原理である。これもまた日本農家の屋敷配置の一般的原理の1つと言ってよい。とくに屋敷へ横から入る場合には座敷の位置を方位にかかわらず入口側にとる傾向がみられる。これは座敷空間を屋敷の入口側に必ず面

するという武士住宅における正面型の配置原理<sup>註4)</sup>に似ている。座敷が前回でみた併列系住宅と違い、客間の側面が強いことにも関係がある。

## 1.2 勇野組の住宅の発展過程

図3は勇野組における調査住宅の発展過程をみたものである。図に示す現住宅は調査時のものであるが、前住宅は聞き取りによる復元である。記憶の掘り起こしであり厳密な平面ではないが、およその平面構成は分かる。前回の研究でみた宮崎県五ヶ瀬町の併列系住宅における中廊下型の成立の契機は昭和40年代のカヤから瓦への屋根替えに伴う大規模改善であったが、この集落では既に

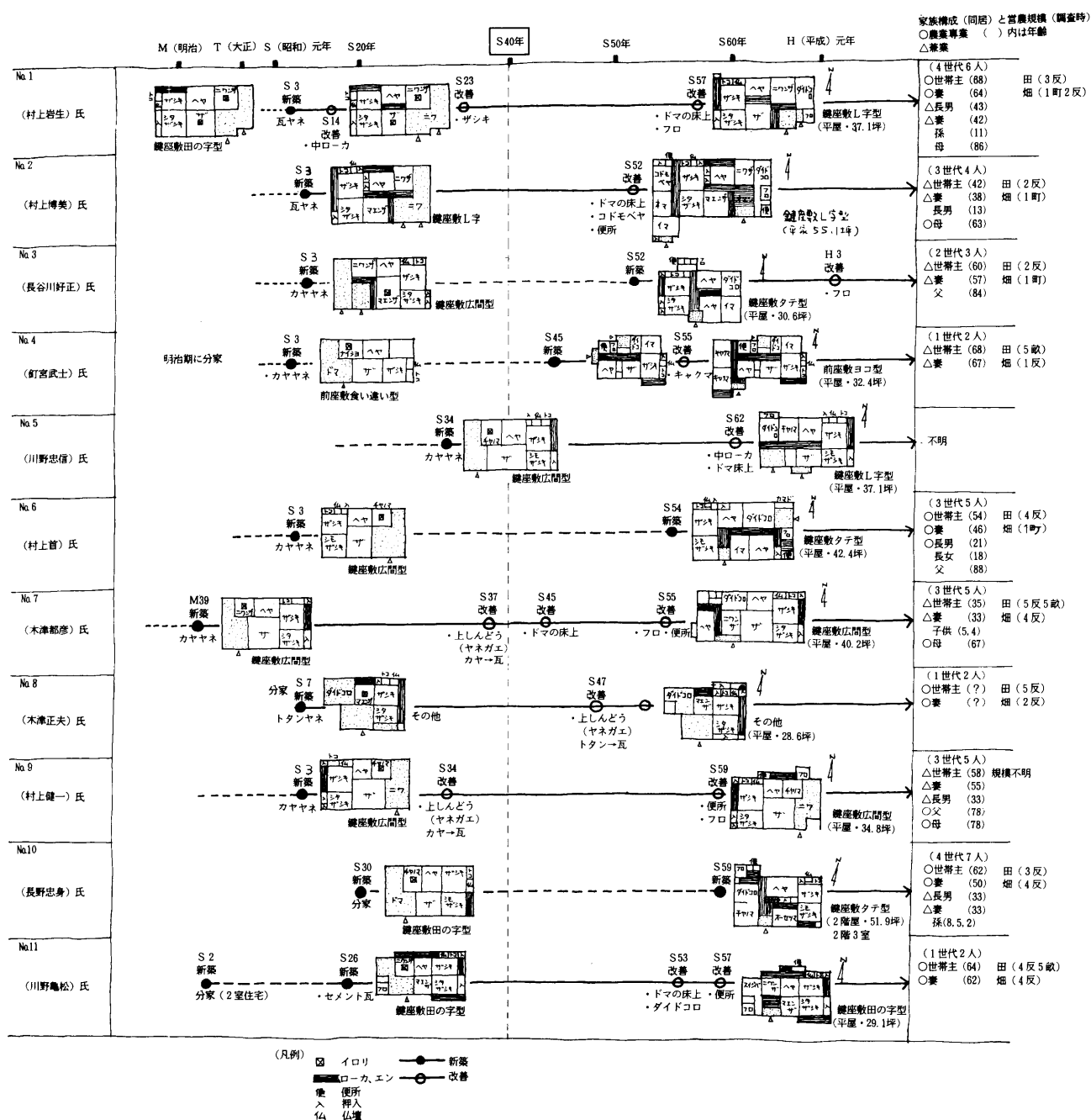


図3 長谷集落・勇野組の住宅の発展過程

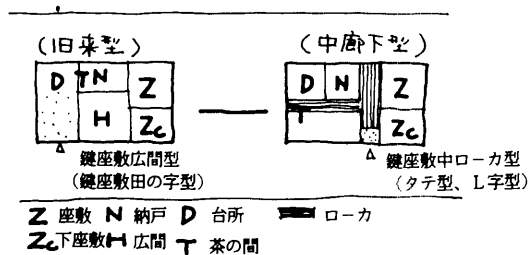


図4 鍵座敷系住宅の旧来型と中廊下型

昭和初期に瓦屋根に変化している。この住宅のことを東（アズマ）屋根と称している。これは昭和3年に集落火災を起こし、図のNo. 1, 2, 3, 4, 6, 9の農家が焼失し、その後の建て替え時にNo. 1と2の農家が瓦屋根に変えたものである。他の家は古家を購入し移築したのでカヤ葺きのままであった。その後の屋根替え（うわしんどう）が行われるのは昭和30年代であり、これも山間の五ヶ瀬町に比べて早く展開している。中廊下の導入は昭和3年の火災による建て替えの時にNo. 2の農家で行われている。その後は昭和14年にNo. 1の農家が中廊下に改善するが、集落全体に普及するのは、やはり昭和40年代以降であり、とくに50年代になって一挙に増加している。

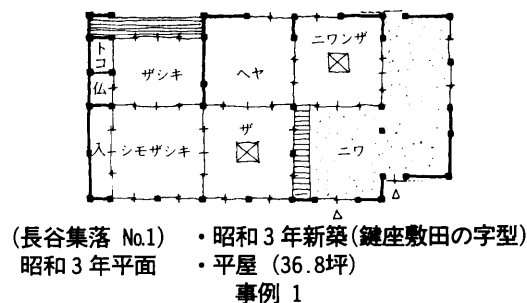
住宅発展の仕方には、漸次的に変化する層と、規模・室数の小さなものから一挙に拡大変化する層の2つがみられ、旧来型から中廊下型への発展は後者の層で展開されていること、この層はどちらかと言えば集落内の中間層であることを前回の研究において指摘した。このことはこの集落でも指摘され、まずNo. 2の上層農家（戦前の自作農）の改善を端緒にNo. 1の農家に影響を与え、昭和40年以降にNo. 3, 6などの農家などによって新築時に普及している。後者の2戸の農家は戦前は自小作であり、集落内の中間層である。

以上、この集落でみた鍵座敷系住宅の旧来型から中廊下型への変化は図4のごとくに示される。すなわち、タテ型の鍵座敷の接客祭礼空間と茶の間などの家族生活空間を分離する意図で中廊下が設けられ、座敷構成はタテ型の鍵座敷の構成を継承している。このような鍵座敷系住宅はこの大分県中部に分布するだけでなく、東北、中部地方にも広く分布している全国的な住宅型であるが、いずれもこのような発展がみられる。

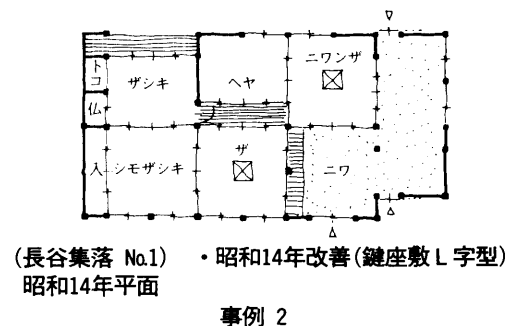
### 1.3 事例からみた中廊下型成立とその要因

#### ①昭和初期の中廊下型への改善と要因

**事例1**の農家は昭和3年に起きた集落火災後に建て直した住宅である。防火のために屋根は瓦に変え、壁は漆喰で大壁にしている。平面構成は鍵座敷田の字型である。この鍵座敷田の字型の成立を生活の発展からみれば、鍵座敷広間型の広間の奥の部屋（ヘヤ）の拡大により田の



(長谷集落 No.1) ・昭和3年新築(鍵座敷田の字型)  
昭和3年平面 ・平屋 (36.8坪)  
事例 1

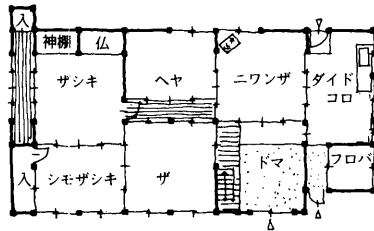


(長谷集落 No.1) ・昭和14年改善(鍵座敷L字型)  
昭和14年平面  
事例 2

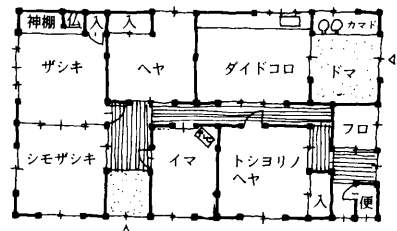
字型へ発展したと言えるが、構造的にみればもう1つの要因がある。広間型の場合は、広間背面の南北の差し物（梁）の長さは2間半から3間が必要である。そのような大きい材料の不足と高い材料費から梁間を縮めて田の字型にする例も多くみられる。分家の住宅に田の字型が多いのもその理由の1つである。また鍵座敷系住宅の古いものはほとんど平床であるが養蚕による通風のために妻床に変えている。

昭和14年に中廊下を設けているが(事例2)、その理由は茶の間の部屋（ニワンザ）から座敷（ザシキ）への行く場合に「ザ」を通り抜けるという問題である。すなわち客事の時、座敷での準備（お膳などの用意）が済むまでは「ザ」の部屋が客の待機場所になるが、茶の間（ニワンザ）からの配膳用意は事例1の平面では待機場所の「ザ」を通ることになり不都合が生じる。また日常的にも問題が生じていた。この地方では別棟隠居は一部上層農家にみられるが、ほとんどは座敷前の「シモザシキ」をそれに充てる。世帯主夫婦の寝所は奥の「ヘヤ」である。これらの2つの寝所の位置関係をみれば、互いのプライバシーを守るための対角線就寝<sup>(注5)</sup>であり、これは法則的な就寝空間の配置である。この場合にしても毎朝の座敷の仏壇へのお参りにはシモザシキを通ることになり問題が顕在化していた。以上からして、この農家における戦前の中廊下導入の要因はあくまで接客祭礼をスムーズに行うためのものであり、家族生活空間からの問題はまだ顕在化していない。

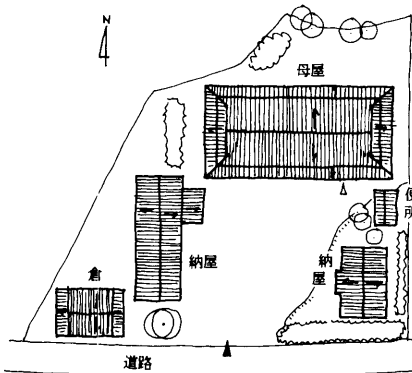
その後の住宅の改善は、昭和23年に座敷の床を妻床から平床に改善し、座敷を6畳から8畳に拡大している(事例3の座敷)。結婚式における新郎・新婦の座る場所は床の前であるが、妻床の場合だと座席配置における中心性が偏るのが改善の主たる理由である。このように、昭和



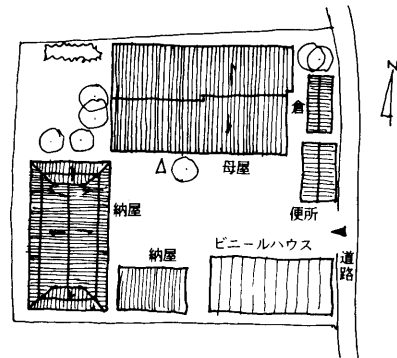
(長谷集落 No.1) 現状平面  
・昭和57年改善(鍵座敷L字型)  
・平屋 (37.1坪)  
事例 3



(長谷集落 No.6) 現状平面  
・昭和54年新築(鍵座敷タテ型)  
・平屋 (42.4坪)  
事例 5



(長谷集落 No.1) 屋敷配置  
事例 4



(長谷集落 No.6) 屋敷配置  
事例 6

20年代は座敷空間の改善が主であったが、家族生活空間の改善が行われるのは昭和57年である。事例3にみるように土間の床上化とフロの屋内化を図っている。ところで農家にとって宗教的、接客的な様々な生活の場であった「ザ」の空間は、座敷空間の改善と中廊下の導入、家族生活空間の拡充という改善過程の中でその空間の意味が次第に薄れてきている。これは前回の研究でみた併列系のオモテ空間の展開とも類似しているのである。

## ②中廊下型住宅の新築とその要因

勇野組の中で一番早く中廊下型の住宅を新築するのはNo. 4の農家である(昭和45年新築)。しかしこれは大分市の都市住宅を購入して建てたものであり、農家住宅の新築としてはNo. 6の住宅(昭和54年新築)が最初と言える。この農家も昭和3年の集落火災で家を焼失するが、その後に建てた住宅はカヤ葺きの典型的な鍵座敷広間型であった。この農家は集落内では経営規模も大きく、田が4反と畑作1町歩(自作8反・小作2反)、ビニールハウス2反と幅広く耕作し、戦前からの自小作の中堅農家である。世帯主は54歳、後継者は21歳、ともに農業に専従している。事例5がその中廊下型住宅であるが、広間の「ザ」は消滅し、タテ型の座敷空間と家族生活空間が中廊下で区分されている。茶の間(イマ)と老人の部屋(ヘヤ)は南面化している。この住宅は世帯主が40才の時に建てたものであるが、その世帯主を中心に家族全員で間取りを考えている。とくに中廊下を設けた理由については、「前の住宅ではザ(広間)を通してザシキに行く

時、ザに客がいる時は不便であった」、また「年寄りが便所にはってでも行けるように」などを挙げている。前の住宅では広間(ザ)の奥の部屋(ヘヤ)が若夫婦の寝室であり、祖父母は別棟の納屋の2階が隠居部屋であった。シモザシキは子供たちの部屋であった。ところが、「納屋の2階では日当たりも悪く、母家で一緒に夕食した後にまた寒い納屋に行くことになり、年寄りなのにかわいそうであった」、「新築時に是非年寄りの部屋を日当たりの良い南側にと考えていた」という理由で南に老人室を設けている。座敷空間についても、「集落内の集まりはほとんど公民館で行うが、ここから出て行った者が盆と正月に帰るために必要である」としている。このように、若い世帯主を中心とする農家家族の意識は、家族生活重視の近代的家族観と家の維持の2つの命題を表現している。中廊下はそれが両立できる調整空間とも言えよう。

## 2. 前土間系住宅の中廊下型成立とその要因

(福井県敦賀市越坂集落と今庄町八飯集落)

### 2.1 対象集落の概要と屋敷配置

前に述べた鍵座敷系住宅が、住宅の横に土間をもつ「横土間型」であるのに対して、福井県を中心に分布する住宅は「前土間型」である。それは住宅入口の前側が土間であり、その奥が床上であり、その最も奥が仏間一座敷を設けた平面である。これは仏間一座敷の位置が土間の上がり口からみて奥の方(上座)に設けられるという点で横土間も前土間も同じであるとも言えるが、しかし住

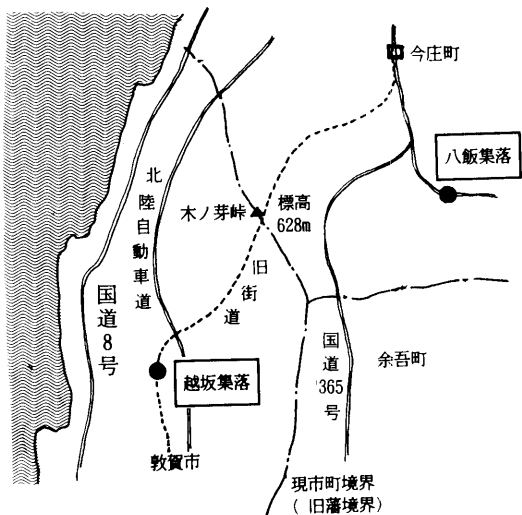


図5 越坂集落と八飯集落の位置

宅の入口正面との関係で言えば、横土間型は住宅正面に座敷空間をとるが、前土間型は住宅背面にとるという違いとなる。これは冒頭に述べたように、専用仏間をもたない一般農家の座敷には客間的側面と仏間的側面の2つが含まれていることを指摘したが、この点にも関係している問題であろう。

このような前土間系住宅はさらに地域によって数種の型に分かれるが、北陸地方全般にわたってそれぞれの地域の住宅の特徴と変容を詳細に調査したものとして玉置伸悟氏の「北陸地方における農家住宅の変容過程に関する研究」<sup>〔6〕</sup>がある。著者らも福井県中南部を対象にして、江戸後期から明治期の古い住宅は旧藩の領域で明確に異なっていることを実証した<sup>〔7〕</sup>。今回の調査はそれらの成果を受け図5に示した集落を対象にして課題の究明を行った。

福井県内に分布する住宅は概ね3の系統に分かれる。**A型**は旧小浜藩の若狭地方に分布し、**B型**は旧福井藩の今庄から武生にかけて分布し、**C型**はその北に分布する。同じ**A型**でも妻入りの**A<sub>1</sub>型**と**A<sub>2</sub>型**に分かれるが、前者は小浜市以西に、後者は小浜市以东に分布しており、その分布境界は旧藩内部の代官管轄領域と大工の仕事圏域にはば該当することを明らかにしている。今回の調査対象の2つの集落は、1つは敦賀市、他の1つは今庄町にあり、どちらも境界付近に立地する。この境界は尾根であり、江戸時代には福井藩と小浜藩の領境であった。その尾根の境界を旧北陸街道が木の芽峠を通して両集落を結んでいる。住宅の平面はこの境界の両側で異なっていた。八飯集落のある今庄町は図6にみる前土間B型(玉置氏らは越前I型と称している)であり、越坂集落のある敦賀市は前土間A<sub>2</sub>型(同様に若狭I型)である。この2つの住宅は同じ前土間型でもドマ、ザシキ、ブツマ、ダイドコロ、ナンド、の基本空間の位置関係が全く異なる。

まず、越坂集落は敦賀市から約15km程の山間に入っ

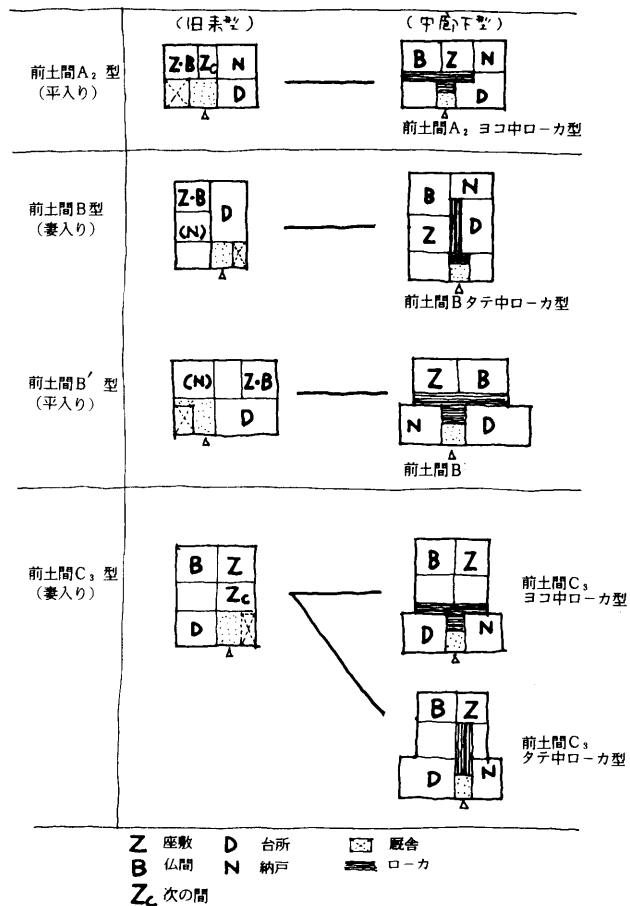


図6 前土間系(住宅の旧来型と中廊下型)

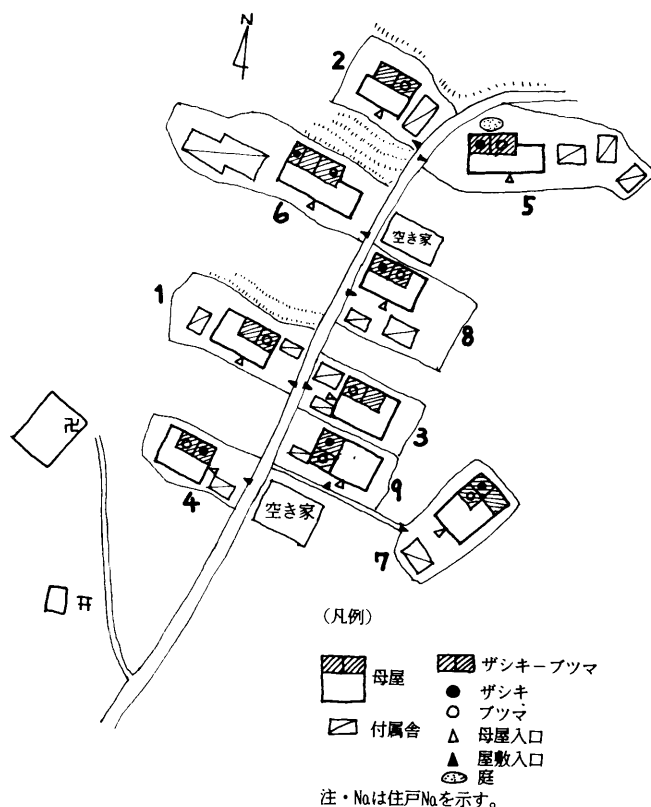


図7 越坂集落の屋敷配置(現状)

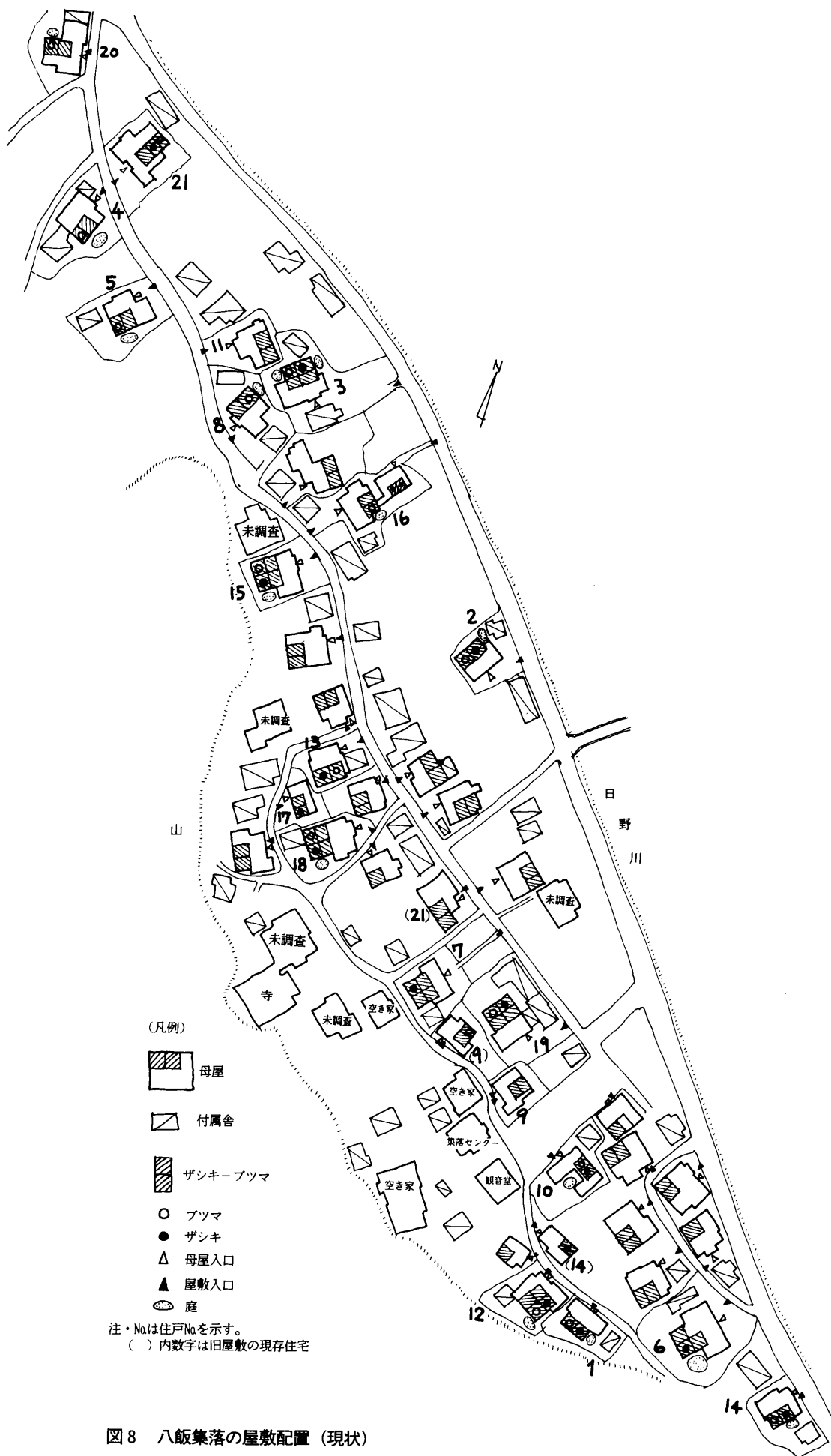


図8 八飯集落の屋敷配置(現状)

た所にあり、山麓塊状村である。集落の戸数は明治期には30戸であったが、昭和26年には16戸に減少している。その後30年代に4戸、40年代以降に2戸が離村し、現在9戸になっている。しかし、7戸には30代以下の若い後継者がおり、兼業ではあるが安定した農家である。集落の中心は旧北国街道が通っていた。現在の道幅は3 mであるが、昭和40年までは旧街道の1.5mの幅でしかなかった。南北の旧街道に沿って、その両側に屋敷が張りついているが(図7)、住宅母家はいずれの農家も緩やかな南斜面の方向に向かって配置するという規則性を有している。平入り住宅であるのでそうせざるを得ない。しかし屋敷幅が狭い農家では道路に面した妻側から入る形式もみられるが(No. 3, 4, 7)、それは平入りの平面を妻入口に変えただけである。ところが尾根境の向こう側の今庄町の八飯集落をみるとその配置は全く異なっている。八飯集落は、今庄町の中心部から約4 km程山間に入った所に位置する塊状村である。現在居住しているのは42戸で空き家が6戸みられる。この集落では昭和34年の平面調査の記録(家屋台帳)が残っており、その平面は間仕切りなどを克明に記載している。従って、昭和34年当時の状況とその後の変化を併せて考察した。34年当時の戸数は48戸であった。図8の集落の屋敷配置図では、No. を記入している21戸が調査農家であり、34年以降の新築農家はこの中にすべて含まれている。No. を記載せず座敷空間の位置のみを示している住宅は基本的な間取りが現在も34年当時のままの農家である。図8をみると、住宅の向きは様々な方向に向いており、方位に関する規則性はなく、住宅入口と屋敷入口の向きはほとんどの農家で一致する。すなわち、屋敷入口がどのような方位に面していようと住宅入口もその方向に面している。北陸地方以外の東北、中部、九州では、農家住宅の向きが屋敷形状の違いにかかわらず南もしくはそれに近い方位が8～9割を占める<sup>(注8)</sup>という実態に比べて特徴的な配置原理と言えよう。これは道路からみれば住宅母家の入口正面性を強く意識した配置であり、ザシキブツマの位置からみれば方位とは全く関係なく常に背面型となる。住宅の正面外観も、元々この集落では平入りと妻入りの住宅が混在していたが、平入りの住宅も改善と新築の過程で2階は妻側を入口正面に向けるという1階平入り・2階妻入りの独特の正面外観に変化してきている。これに対して越坂集落の場合は同じ前土間型でも1、2階とも平入りのまま発展しており、このことも大きく異なる点である。

## 2.2 集落別にみた住宅の発展と中廊下型の成立

### 2.2.1 越坂集落の場合

#### ①集落全体の住宅の発展過程

図9は越坂集落における各戸の住宅の発展過程を示し

たものである。現住宅は調査住宅であるが、その前の住宅は聞き取りによる復元平面である。

前述したように、この集落の江戸後期の基本型は平入りの前土間A<sub>2</sub>型であった。No. 6の最初の住宅がその原型に近い。土間ニワの奥がブツマであり、その左手が寝所である。ダイドコロは敦賀市以西の住宅ではネドコに食い込んで広くとり、ダイドコロから直接ブツマに入る平面であるが、敦賀市域の住宅ではその間仕切りが田の字型になっているのが特徴である。規模が大きい住宅になるとブツマの横に次の間を設ける住宅が増える。このような平面の住宅がその後発展しているのであるが、その変化の時期は大きく分けて2度ある。最初は昭和20年代から30年当初にかけてであり、次は40年代中ごろから50年代にかけてである。この2つの変化期はその内容に大きな相違とそれぞれの特徴を有している。最初の変化期ではカヤ葺きから瓦への変化および平屋から2階屋へと変化しているが、その2階平面の内容は座敷空間の拡大にある。すなわち、1階の奥の部屋が仏間としての神聖な空間に純化し、客を迎える座敷はそこから分離して2階に確保している。そして後者の変化期においては旧来型から中廊下型への変化と2階空間の更なる拡大(寝所が主体)が行われている。ただし、中廊下の導入は全体とし緩慢であり、鍵座敷系住宅でみた接客空間と家族生活空間の分離に加えて、家族生活空間の中でも寝所と居間などの公私分離まで至っていない。前者の分離だけにとどまっている。このように、住宅変化の全体的特徴は、初期の変化期で接客祭礼空間の拡大を主体に、次の変化期で家族生活空間の拡大が主体に図られている。これは先ににみた大分県の長谷集落にも言える農家住宅の法則的発展である。

#### ②事例からみた中廊下型の成立と要因

##### ②-1 初期の変化・座敷空間の2階への拡充

事例7の農家は、昭和26年に新築された前土間A<sub>2</sub>型の住宅である。その後の47年には便所を屋内に設け、ダイドコロとナガシの部屋を区分している。これは従来の炊事場と食事、その後のだんらんを一緒にしていたダイドコロから炊事空間を分離し、食事、団樂の部屋の確立を図ったものである。これはこの集落全般にみられる現象である。昭和26年以前の住宅はカヤ葺きで間取りはこの平面とはほぼ同じであるが、ナカノマは土間であった。そのナカノマの部屋は新しい住宅では板間に変化しているが、そこには稲わらが積まれそこで脱穀が行われ、収穫物の物置としても使われていた。その奥の座敷空間はブツマと称し、その背面には幅1間半の仏壇が置かれ、床は半間しかない。仏間の側面の強い部屋である。

事例9は昭和31年に新築された住宅である。注目すべきは2階に床と脇棚<sup>わき</sup>を設けた座敷と次の間を設けている



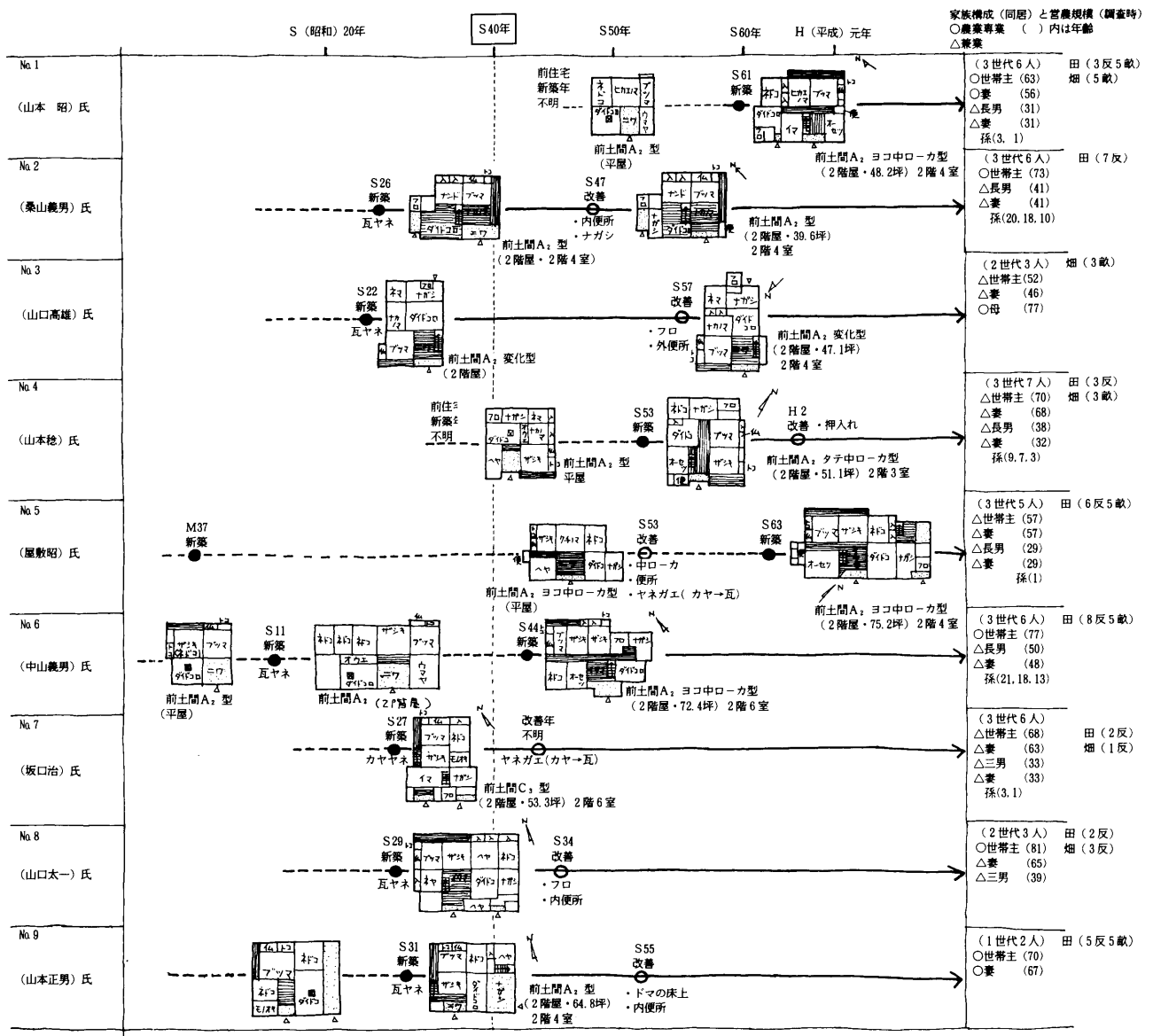
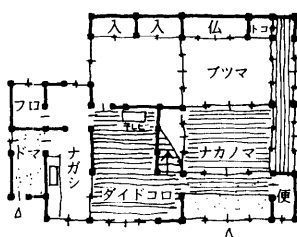
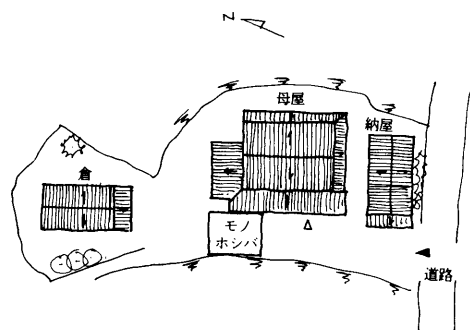


図9 越坂集落の住宅の発展過程



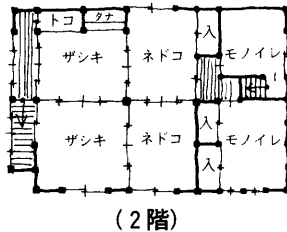
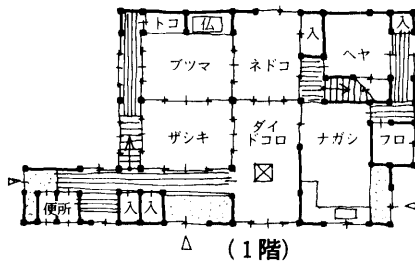
(越坂集落 No.2) ・昭和26年新築(前土間A<sub>2</sub>型)  
現状平面  
・2階屋 (39.6坪) 2階2室  
事例 7



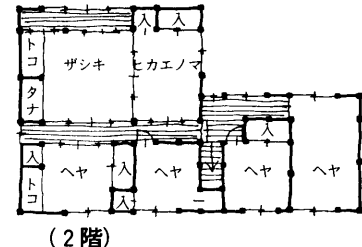
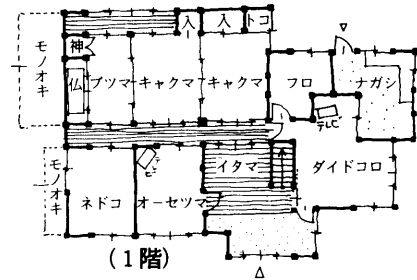
(越坂集落 No.2) 屋敷配置  
事例 8

ことである。1階の奥の部屋をブツマ、2階をザシキにし、接客祭礼空間における仏間の側面と接客の側面の機能分化とそれぞれの拡充を図っている。それに伴って階段も2つ設け、接客用は玄関脇から座敷へ、寝所、物置へ行く家族用の階段はナガシの奥であり、接客用と家族

生活用に分けている。これは「2階に客がいたり、泊まったりしている時に、家族が自分の部屋(2階ネドコ)に行くためにつくった」とされ、中廊下導入の要因と同じである。ただし、2階への座敷の拡大はこの農家が最初ではなく、次にみる No. 6 の農家がすでに昭和11年に



(越坂集落 No.9) ・昭和31年新築 (前土間 A<sub>2</sub>型)  
現状平面  
・2階屋 (64.8坪)  
事例 9

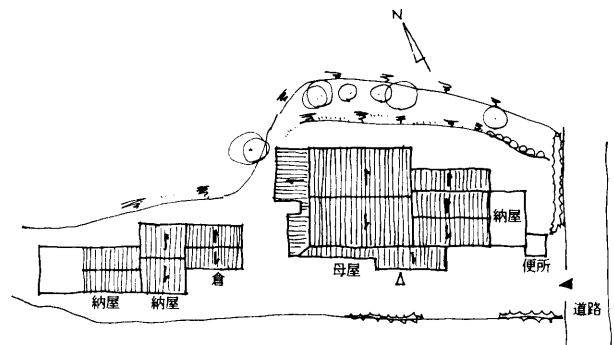


(越坂集落 No.6) ・昭和44年新築 (前土間 A<sub>2</sub>ヨコ中ローカ型)  
現状平面  
・2階屋 (75.2坪)  
事例 10

行っている。

## ②—2 中廊下型の成立と要因

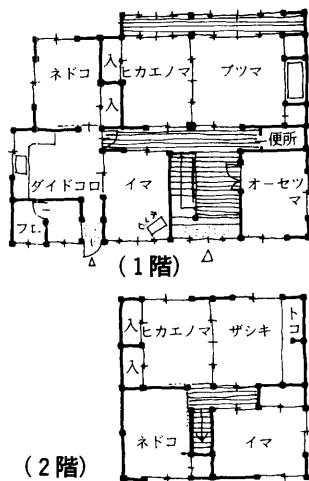
No. 6 の農家は江戸時代には庄屋を務め、現代も集落で経営規模が最も大きい。前住宅と前々住宅の平面も聞き取りで復元し図9に示している。現在の世帯主(77歳)は昭和44年の新築(当時53歳)のみならず、昭和11年(当時20歳)の前住宅の新築の際にも中心的に関与している。昭和11年に建てられた前住宅は前々住宅に比べて1階平面の拡大と2階屋への変化で一挙に規模が拡大している。その内容は家族生活空間の寢所(ネドコ)の増室と、接客祭礼空間の拡大である。2階の平面は床の間のある座敷一次の間を含む4室の田の字型平面であった。「法事などの客が多く、1階のブツマだけではどうしてもなく2階に座敷を設けた」という。さらに昭和44年には集落で最初の中廊下型住宅を建てている。事例10はその現平面であるが、2階にも中廊下を通して。1階平面では奥のブツマ・ザシキは前住宅と同じ位置に維持したまま東西に中廊下を通し、ネドコ、ヘヤなどの家族生活空間と区分している。2階においても東西中廊下の奥側の部屋がザシキ・ヒカエノマの接客空間であり、その前側が家族生活空間のヘヤである。1階平面と同じくこの地域の平面原理を2階平面まで厳然と踏襲している。中廊下導入の理由は、「客間にも自分の部屋にも同時に行けるように」とされ、接客時における家族生活の安定を意図したものである。昭和44年当時における2階の座敷化についても、「とくに法事が隔年にあり、その客は約40人にもなる。これをさばくには、どうしても1階のブツマなどの部屋と2階の座敷が必要になる。」「また泊まり客は仏壇の前では寝かせられず、2階の座敷が客の寝室に必要である。」「また「日常の近親の客は応接間でおこな



(越坂集落 No.6) 屋敷配置  
事例 11

うが、あらたまった客には2階の座敷で対応する。」としている。このように仏間的側面と客間的側面の空間的分離が住宅発展の大きな内容となっていると言える。

以上是集落内の上層農家の中廊下型の成立であったが、事例12は昭和61年に新築した中間層農家の中廊下型住宅である。家族は3世代6人であり、世帯主(63歳、新築当時56歳)と後継者(31歳、新築当時24歳)とで相談しながら平面を考えている。図9に示した前住宅との関係でみれば、前住宅の平面構成を厳然と継承した上で中廊下を導入している。とくに親子で一致した点は、「ブツマは家の先祖で最も大切であるからして、家の一番良い場所に置く」とし、その位置は方位には関係なく「住宅の奥の中心部である」としている。また仏壇への毎朝のお勤め(お経、ごぜん)は世帯主夫婦が行っているが、朝食前には家族全員が個々に礼拝している。その仏壇の位置は江戸後期の古い住宅では住宅の背面の平床(とこ)形式が一般的であったが、部屋の風通しと採光から妻床(とこ)形式に変化している。中廊下を取り入れた理由についても「前の住宅では客がきた時にダイドコロから自分の部屋に行けない」、「座敷に客がいても自由に各部



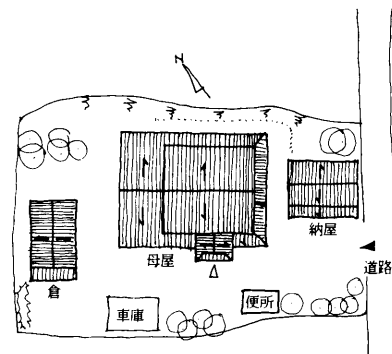
(越坂集落 No.1) ・昭和61年新築(前土間A<sub>2</sub>ヨコ中ローカ型)  
現状平面  
・2階屋 (48.2坪)  
事例 12

屋へ行けるように」とされ、接客時における家族生活へのディスタブの改善を強く意識している。この住宅もNo. 6 農家と同様に2階への座敷拡大を行っている。その部屋の位置はこの農家においても奥側であり、南側はネドコとイマ（若夫婦の部屋）である。2階への座敷拡大の理由については、1階のヒカエノマを座敷にし、そこに床を設けると仏壇と床が向かい合う「向かい床」になるので2階に座敷を設けたとしている。このように、祖先信仰の典型としての仏間空間の維持拡充と接客のための座敷の拡大を家の必須条件と認識し、一方で家族生活空間の充実を図るという住意識は、このような現代農村における典型的な初老夫婦と若夫婦の3世代兼業農家にも貫かれている。

## 2.2.2 八飯集落の場合

### ①集落全体の住宅の発展過程

既に述べたように、八飯集落では34年当時における全戸の調査平面（家屋台帳）があるので、それと比較し、以後の変化を考察する。図10は、現在居住している42戸のうち34年以降に新築または改善をした21戸についてその変化をみたものである。前住宅は昭和34年の年代軸に並べており、当時の現状平面を示している。この地域の江戸時代後期の平面は図6にみる妻入りの前土間B型と平入りの前土間B'型が分布していた<sup>注9)</sup>。この2つの型は平面の構成は基本的には同じであるが、入口が妻入りと平入りとに異なる。旧街道沿いの集落では妻入りが多い傾向にあるが、この集落では平入りが多い。昭和34年当時の前平面48戸を分類すると、妻入りの前土間B型は8戸、平入りの前土間B'型が30戸、それに前土間C<sub>3</sub>型（図6参照）が6戸、いずれの型にも分類できないのが4戸である。前土間C<sub>3</sub>型とは江戸後期においては隣接する河野村などに分布していた型であり、福井県中部以北に分布する住宅と座敷構成が類似しているが、土間一ダ



(越坂集落 No.1) 屋敷配置  
事例 13

イドコロの構成が異なる住宅である。その八飯集落のC<sub>3</sub>型の最初の建築時期は明治30年であり、前土間B系住宅の分布域の周辺に分布していた前土間C<sub>3</sub>型が明治以降になって混在してきたと言える。この地域の住宅の変化でまず第1に注目すべきは玉置伸悟氏が指摘してきたように規模の著しい拡大であろう。これを昭和34年当時の集落全戸の平均規模と、それ以降に新築された住宅の平均規模と比較すると、前者が39.2坪で後者が61.6坪である。実に約1.6倍に拡大している。これは平屋から2階屋への変化に伴う拡大が大きい。34年当時の2階屋は全48戸のうちNo. 18の住宅1戸だけである。それがその後には42戸中41戸が2階屋に新築または改善をしている。34年当時の平面は土間が広くとられ、多くの農家ではウマヤが存在している。ウマヤがへやに変わり、土間が板間に変化するのは30年代後半である。座敷空間はブツマと称する農家が多く、前にみた越坂集落と同じである。

一般農家の住宅における座敷空間の成立は、ブツマ空間に出発とするものと、ザシキ空間に出発するものに分けられると考えられる。当初仏壇は農家住宅の一般層においては家族生活空間の広間などに置かれていたが、接客祭礼空間の拡大の中でブツマ空間が先に確保されて次第にそれが座敷空間へと発展する過程と、客間としてのザシキが先につくられてから次第に床が設けられ、そして仏壇がその床の脇に設けられるという2つの過程が考えられよう。この前者の過程としてNo. 2の住宅を挙げることができる。住宅の奥のブツマの背面は仏壇を置く板間があるだけである。さらに古い住宅に遡るとそこはナンドと称している住宅が多い<sup>注10)</sup>。そして広間（ダイドコロ）にあった仏壇はナンド空間をブツマに変え、そこを祭礼空間として神聖化していったと考えられよう。このことは住宅の奥が接客祭礼空間として、前に家族生活空間を配するという特徴的な前土間型住宅の発展の要因に繋がると考えられる。それに前回で報告した九州五ヶ瀬町の併列系住宅の発展と比較すると一層興味深い。すなわち、その併列型における2室から3室への拡大過程において土間から最も奥にツボネと称する寝所がとら

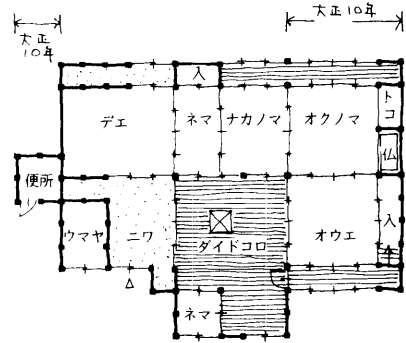
れ<sup>(注11)</sup>、その後、ツボネが奥と前に分割し、中央の広い部屋（オモテ）にあった仏壇がその奥のツボネに移動する<sup>(注12)</sup>。ヨコ中廊下が導入されると、その中廊下の奥にブツマと称する部屋が確保され、中廊下の前は家族生活空間が配置されるのであるが、その発展過程はこの前土間型と極めて共通しているのである。

この集落に最初に中廊下型住宅が成立するのは昭和39年である（No. 8, 9）。越坂集落は44年の新築が最初であったので若干早いと言える。34年に新築された No. 18 の住宅に一部中廊下のようなものがみられるが、これは土間にあったウマヤが応接間に改善した結果つくられた板間の延長であり、空間分離を意識した中廊下ではない。その後、40年代後半から50年代にかけて多くの新築が行われ、中廊下型が一挙に普及している。この時期は30年代から始まった農業以外への兼業化が一般化した時代とも重なり、住宅金融公庫の融資も相まって改善と新築が促進されたと言える。また前住宅の経過年数も平均76年に達しており、この時期がちょうど明治期に建てられた住宅の更新時期になっている。これらの旧来型から中廊下型への変化は図6にみるような発展を呈しているが、やはりこの地域の伝統的平面構成が継承された上での中廊下導入である。次に、その変化を具体的に見てみたい。

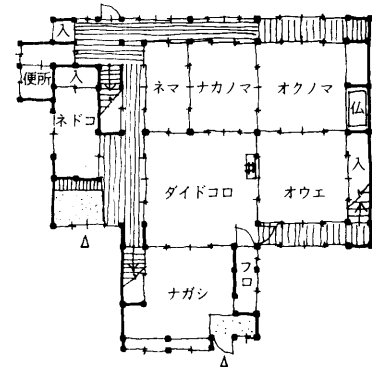
## ②事例からみた中廊下型成立と要因

### ②-1 初期における中廊下の改善と新築

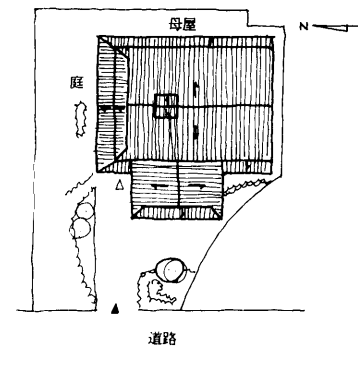
**事例14**は分家であるが、田1町3反を耕作する上層の専業農家の明治22年に建築した住宅である。建った当時の平面はオクノマ―オウエの部屋と便所はなく、屋根はカヤ葺きであった。平面の型は平入りの前土間B'型である。大正10年にオクノマとオウエを増築しているが、その2階には床と床脇を設けた8畳の座敷と、次の間を設けている。前にみた越坂集落における1階のブツマの充実と2階への座敷化という空間分離が、この集落では既然大正10年に行われている。分家とはいえ当時の世帯主が村長を務めていたための接客空間の必要性からであった。日常はオクノマとナカノマには畳を敷かず、接客は常に2階で行っている。オウエは世帯主の日常の居間であり、寝所はダイドコロを挟んで奥のネマが老夫婦、前のネマが若夫婦である。その部屋は2畳とかなり狭い。昭和36年にはダイドコロの前にナガシを増築し、茶の間と炊事の空間区分をしている。茶の間空間の拡充である。昭和39年には、**事例15**にみるように中廊下を設け、瓦への屋根替えを行い2階の増築を図っている。その際に、土間の奥の物入れであったデエは寝所（ネドコ）に改善し、ダイドコロとの間に中廊下をタテに設けている。その理由としては「ダイドコロを通らずに各部屋へ行けるように」、「それはとくにダイドコロで客がいた場合」を挙げており、接客と家族生活の対立が要因になっている。



(八飯集落 No.11) ・明治22年新築（前土間B'型）  
昭和34年平面 ・2階屋（50.6坪）  
事例 14



(八飯集落 No.11) ・昭和38年改善（前土間B'タテ中ローカ型）  
現状平面 ・2階屋（53.4坪）2階2室  
事例 15



(八飯集落 No.11) 屋敷配置  
事例 16

**事例17**は前事例と同じ型の平面で明治38年の建築である。寝所はダイドコロの手前のヘヤが一室あるのみであり、世帯主夫婦はそのヘヤに寝るが老夫婦は奥のナカノマに寝ていた。昭和37年にダイドコロの上手奥に老夫婦の寝所の確保と土間（ニワ）を板間に改善したが、わずか2年後に新築し、**事例18**にみる中廊下型平面に変化している。その理由としては、「前の家では部屋が全部繋がっているから、ある部屋を使っていると戸を開けることができず暗い家であったので明るい家にしたかった」とし、中廊下をタテに設け、ブツマ―ザシキとネマ、ダイドコロの部屋を区分している。通風、明るさなど家族

家族構成(同居)と世帯規模(世帯主)  
○世帯主 ( ) 内は年齢  
△世帯主

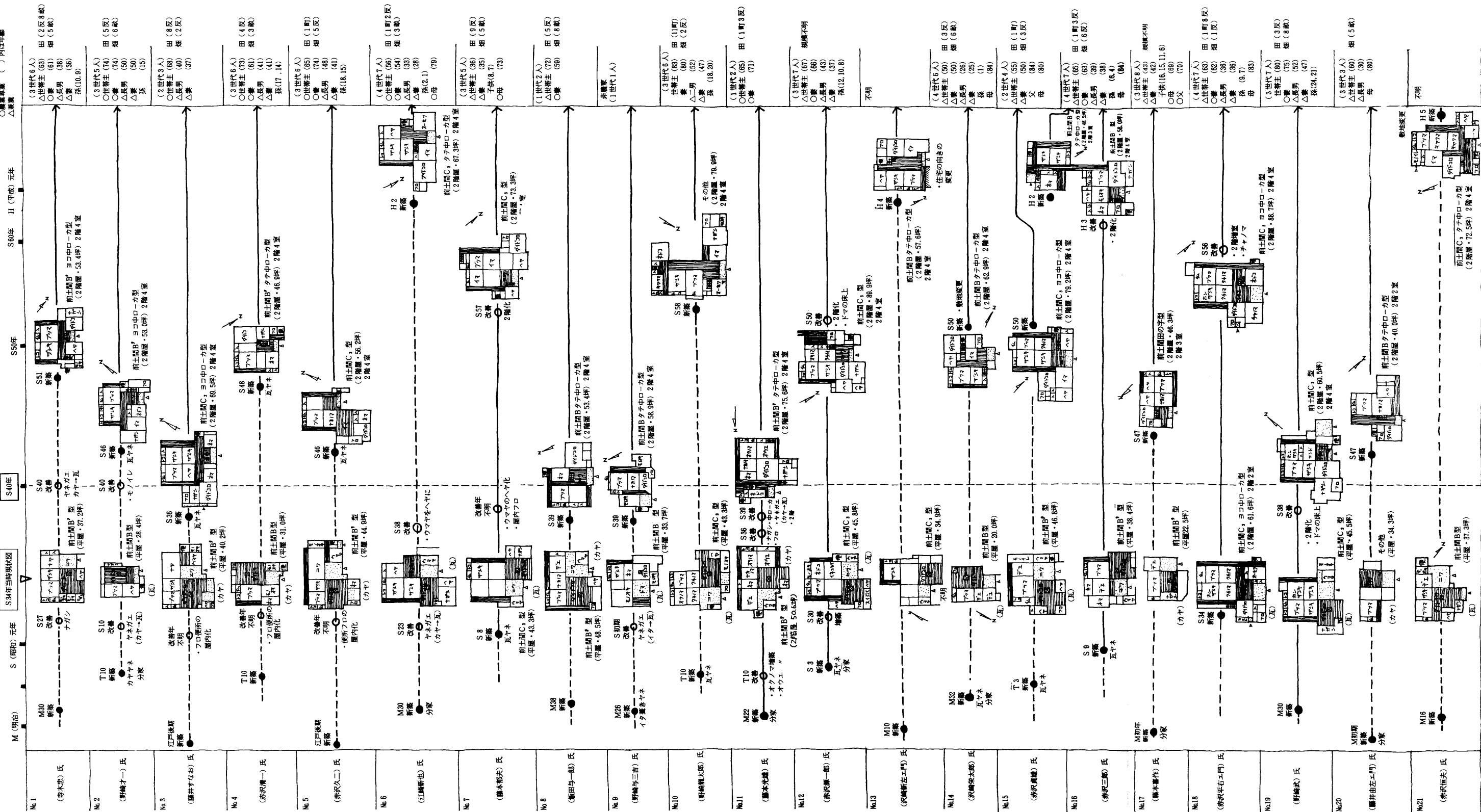
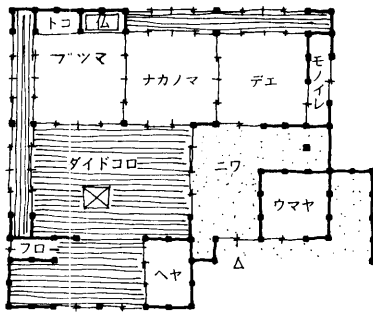
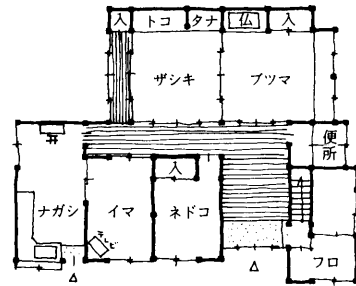


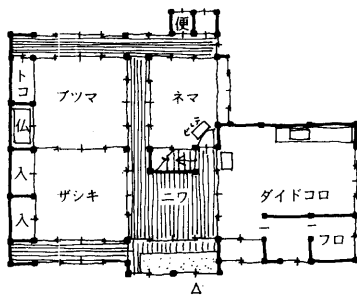
図10 八飯集落における住宅の発展過程



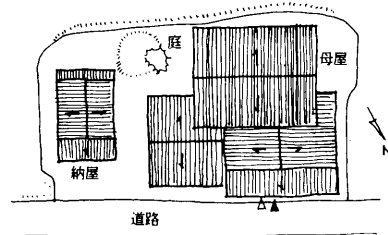
(八飯集落 No.8) ・明治38年新築 (前土間B'型)  
昭和34年平面 ・平屋 (49.5坪)  
事例 17



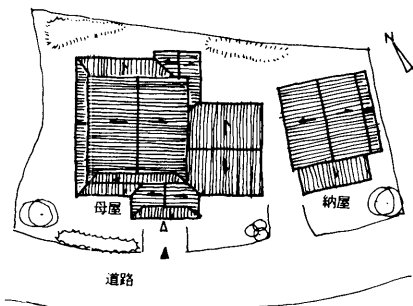
(八飯集落 No.1) ・昭和51年新築 (前土間B'ヨコ中ローカ型)  
現状平面 ・2階屋 (53.4坪) 2階4室  
事例 21



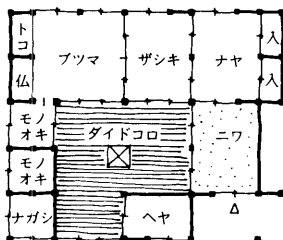
(八飯集落 No.8) ・昭和39年新築 (前土間B'タテ中ローカ型)  
現状平面 ・2階屋 (54.4坪) 2階4室  
事例 18



(八飯集落 No.1) 屋敷配置  
事例 22



(八飯集落 No.8) 屋敷配置  
事例 19



(八飯集落 No.1) ・明治30年新築 (前土間B'型)  
昭和34年平面 ・平屋 (37.2坪)  
事例 20

生活空間の改善を強く意識した変化であり、結果として  
ブツマ座敷の続き間をヨコ並びからタテ並びに変えて  
いるが、「ブツマの位置は前住宅と同じに考えた」とし、  
家の重要な部屋を住宅の最も奥に設けるという平面原理  
を継承している。

## ②-2 中廊下型への変化と要因

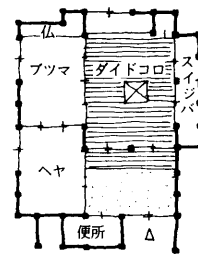
No. 1 の農家は現在3世代6人家族であり、世帯主は  
大工である。妻が農業に専従し、30代の長男夫婦は武生  
市に勤め日曜日には農業を手伝う。経営規模は田3反、  
畑6畝で集落内では小規模である。事例20はその農家の  
明治30年に建てられた前住宅で、その平面は平入りの前  
土間B'型である。昭和51年に建て替えているが、当然の  
こと大工である世帯主自らが平面を考えている。事例21  
をみるとブツマザシキの接客祭礼空間とナガシーイマ  
ネドコの家族生活空間の位置関係は前住宅と同じであ  
る。それらの2つの空間領域を前後に区分するようにヨ  
コ中廊下を設けている。その理由は「昔はダイドコロを  
通っていたが、部屋を通らずにどこへでも行けるように」  
とし、家族生活の安定を考える一方で接客祭礼空間もま  
た次のように重視している。「仏壇は、世帯主が朝一番に  
“ご膳さん”をあげ、その後家族全員がそれぞれに参る  
ので、仏壇を置くブツマは家族を見守る一番良い所に置  
いた」とし、ザシキの必要性として、「5年前までは毎年  
12月16日に親戚を20人位呼んで報恩講(仏事)をした。  
現在は法事のある時だけにしているが、それでも手料理

を出すのでザシキは必ず必要である」と考えている。また「盆・正月には親戚が集まる。昔に比べるとその人数はかなり減ってきたが、やはり必要である」としている。前にみた No. 11 農家の座敷は2階であったがこの農家では2階を4室とも若夫婦の居室に使うので、1階にブツマとザシキを設け、続き間の形で配置している。その仏壇と床の位置は、前住宅のような平入りの前土間B'型では妻側に設けるのが一般的な傾向であったが、住宅入口正面もしくは家族生活空間に向けるように住宅背面(平床)に変えている。

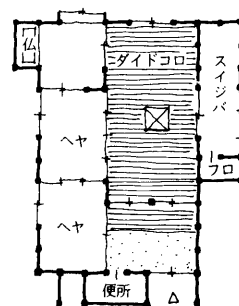
事例23は No. 2 の農家の前住宅であり、大正10年に分家した時に建てたものである。妻入りの前土間B型である。住宅の奥のブツマには床がなく、背面に1尺幅の板間があるだけで、そこに当初から仏壇を置いていたという。この地域での江戸後期の古い住宅にはこのような原型的な平面が多くみられる。昭和10年にカヤから瓦に屋根替えをし、中2階の物置がつくられている。40年には住宅の奥方向に増築し、寝所(ヘヤ)を増やし、スিজバを広げフロを設けている(事例24)。そして6年後に事例25にみる平面に新築している。この平面は先にみた事例21の大工の自宅平面とほとんど同じであり、間取りに関して全てその大工に任せた結果である。屋敷方位は南入りで大工自宅の北入りの屋敷方位とは異なるが平面は全く同じである。住宅の配置において方位が考慮されていないことを示している。前住宅は妻入りの前土間B型であるが、新築住宅は平入りの前土間B'の中廊下型であり、異なる系統の住宅を受け入れたことになる。しかし、ブツマ-ヘヤ-ダイドコロの位置関係は前住宅と同じである。

これまでにみた No. 1 と 2 の農家の中廊下型は平入りの前土間B'型の発展型であった。ここでは妻入りの前土間B型の中廊下型についてみる。事例26は大正10年に建てられた妻入りの前土間B型である。住宅の左奥のブツマには仏壇のほかに床も設けられている。

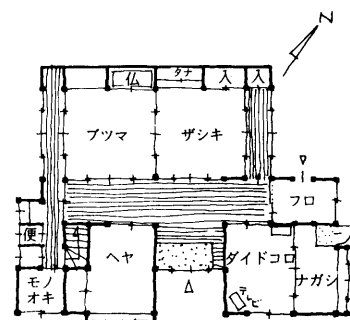
その後、昭和48年には事例27の住宅を新築している。ブツマの手前と右手に4畳の畳廊下を設けているが、これは「日常は中廊下のように使い、大勢の接客時には控えの間、あるいは、ブツマと続けて使うことを考えた」としている。屋敷幅が狭いので次の間がとれず、このような平面になったのであろう。従ってザシキは2階に設けている。この2階のザシキの位置もやはり奥に設け、手前はヘヤをとっている。ブツマ-ダイドコロ-ネマの各部屋の住宅内配置は前住宅と同じである。方位性は全く考慮されておらず、「昔の間取りは親が考えてつくっているのだから、それになるべく添うように新築した」という。そのほかに、「ダイドコロの位置は屋外排水と水路との取り合いから前の位置にした」ということも平面継承の理由の1つである。



(八飯集落 No.2) ・大正10年新築(前土間B型)  
昭和34年平面 ・平屋 (28.4坪)  
事例 23

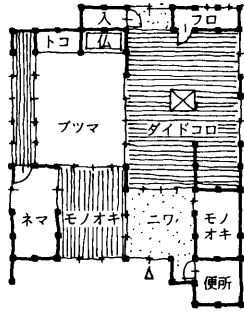


(八飯集落 No.2) ・昭和40年改善(前土間B型)  
昭和40年平面 ・平屋 (36.4坪)  
事例 24

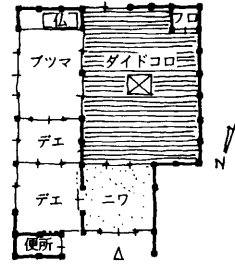


(八飯集落 No.2) ・昭和46年新築(前土間B'ヨコ中ローカ型)  
現状平面 ・2階屋 (53.0坪) 2階4室  
事例 25

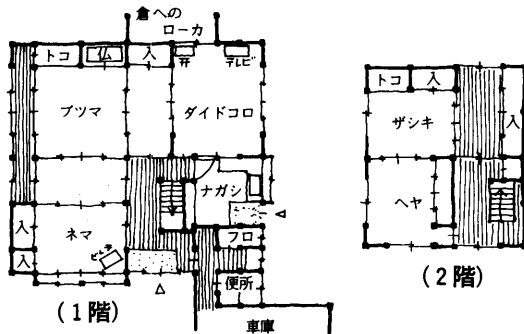
以上のような住宅発展の延長として次の住宅を挙げることができる。事例29は明治32年の分家時に建てられた住宅であるが、当時から瓦屋根であった。平面は事例26と同じく妻入りの前土間B型である。奥のブツマには床はなく仏壇のみが置かれていた。この平面は昭和34年当時の現状図であるからして、明治以降新築までの70年もの間、フロの改善以外全く変化がなかったと言える。昭和50年には、雪おろしのスペースがないという屋敷の狭さから屋敷替えをして新築しているが、規模は平屋の20坪から2階屋の62.9坪に一挙に拡大している。その平面はタテ中廊下が明確にとられた典型的な前土間B中廊下型である。屋敷替えで方位が異なったにもかかわらず、ブツマとダイドコロの位置関係は前住宅と全く同じである。従って、方位ではなく、住宅入口正面からその配置



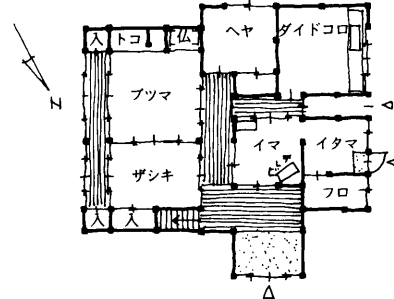
(八飯集落 No.4) ・大正10年新築(前土間B型)  
昭和34年平面 ・平屋 (31.0坪)  
事例 26



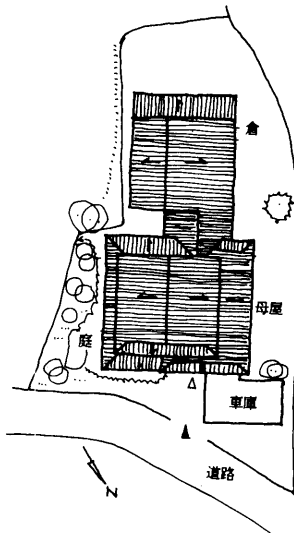
(八飯集落 No.14) ・明治32年新築(前土間B型)  
昭和34年平面 ・平屋 (22.0坪)  
事例 29



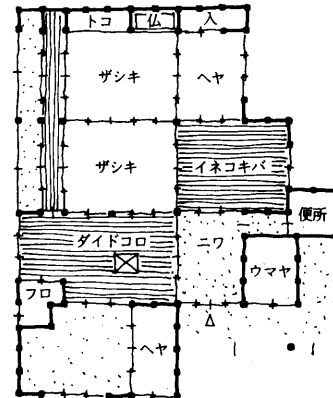
(八飯集落 No.4) ・昭和48年新築(前土間B タテ中ローカ型)  
現状平面 ・2階屋 (46.9坪)  
事例 27



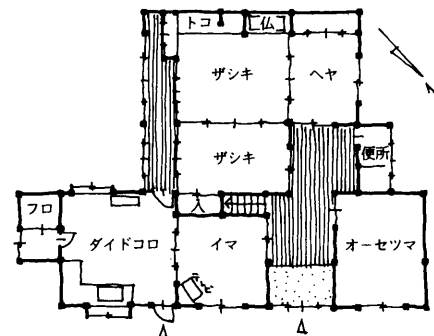
(八飯集落 No.14) ・昭和50年新築(前土間B タテ中ローカ型)  
現状平面 ・2階屋 (62.9坪) 2階4室  
事例 30



(八飯集落 No.4) 屋敷配置  
事例 28



(八飯集落 No.6) ・明治30年新築(前土間C3型)  
昭和34年平面 ・平屋 (50.6坪)  
事例 31



(八飯集落 No.6) ・平成2年新築(前土間C3 タテ中ローカ型)  
現状平面 ・2階屋 (67.3坪) 2階4室  
事例 32

が考えられていると言える。

次に、この集落を含む今庄地域の江戸後期の住宅は前土間B系住宅の分布域であった。しかし明治以降になると周辺地域（河野村など）に分布していた前土間C<sub>3</sub>型が混在してきていることは既に述べた。この住宅は明治期から昭和初期にかけて、集落内の比較的経営規模の大きい上層農家において取り入れられている。妻入りで奥の



部屋は四つ間であり、住宅規模もB系と比べて大きい。

**事例31**はその典型例であり、明治30年の住宅である。分家であるが、田は1町2反、畑は3畝であり、集落内では昔も今も経営規模の大きい層に入る。昭和23年にカヤから瓦への屋根替えをしている。その契機は村の共有林を営林署に転売したことによる現金収入であるという。その際にやはり中2階を設けているが、その部屋はまきとわらなどを収納する物置であった。昭和38年にはウマヤと土間をへやと板間に改善している。平成2年には兼業の後継者（33歳・高校教員）の結婚を契機に**事例32**の住宅に新築している。平面はその若い後継者が主体的に考えたものであるが、接客祭礼空間、グイドコロと茶の間（イマ）の位置関係は前住宅と同じである。祖母の寝所についても、「祖母が落ち着けるように」と前住宅と同じように一番奥のザシキ横の部屋を再現している。その部屋の奥の押入れは将来仏壇の場所としてブツマ空間のザシキからの分化も考慮したという。このように、若い後継者においても家の象徴的空間としてのザシキ・ブツマの部屋の存続が強く意識され、4世代7人の伝統農家的な家族における祖母に対する家族内の位置づけも継承されている。これは農家の「家」の論理が若い世代にも自然に受け継がれている結果でもあると言えよう。と同時にグイドコロ（炊事と食事）とイマ（団欒の茶の間）の分化、2階の世帯主夫婦と若夫婦の寝所などの家族生活空間の拡大を図っているが、それらの接客祭礼空間と家族生活空間を区分するように中廊下が設けられているのであるが、空間的には前住宅における板間のイネコキバが土間の板間の部分とともに中廊下的な空間に変化したものと言えよう。

### 3. 結論

①農家住宅における中廊下型の初期成立の時期と要因およびその契機は地域によって様々である。前回の研究における九州山間部の併列系住宅においては昭和40年代であるが、大分県中部の鍵座敷系住宅においては既に昭和初期にそれが成立している。福井の前土間系住宅においてはずっと遅くて昭和40年前後である。しかし初期成立の時期的差異はあっても多くの農家に普及するのは全ての集落において昭和40年代以降である。この中廊下型への変化の背景には着実な住宅改善の発展過程が内在しているが、それは3つの段階に分けられる。まず最初は昭和10～20年代における接客祭礼空間の拡充である。これは集落の上層農家によって展開している。次は、昭和30年代の農家全般にわたる家族生活空間の部分的改善である。そして3つ目が昭和40年代における中廊下型を基軸とした接客祭礼と家族生活の両面にわたる大きな拡充変化と言える。これは集落内の中間層を中心として展開している。昭和40年代はこの住宅発展の3段階目にあたり、

しかもその時期は明治期に多く建てられてきた小農全般の更新期にあたること、さらに兼業化、機械化の農業の経営基盤が大きく変動した時期でもある。これは、歴史的にみれば、最初の農家住宅の基本平面の成立が江戸後期と考えられることから2番目の大きな基本的平面の成立期であると見なせる。

②一般農家における座敷空間の内容は仏間的側面と客間的側面に分けられるが、座敷空間の成立もこのような側面からの2つの過程があると考えられる。1つは仏間空間が最初に確保され、次に座敷空間も拡充されるが、その場所は1階および2階に分化していく過程がある。2つ目は、座敷空間を最初に確保し、やがてそこに床などの座敷構えがとられ、次第に仏壇を茶の間からその座敷に移動し整備する過程である。福井の前土間系住宅における座敷空間がなぜ住宅の奥にあるのかという疑問も、その住宅の座敷空間が前者の仏間空間の確保から出発しており、それが最初では仏間故に大切な家の象徴的空間として認識され、家族の幸福を見守る祖先信仰の典型としての仏壇の場所を最も住宅内の良い位置としての住宅の中心（奥）に設けられたからと考えられる。これらの空間的意識が現在においても宗教性の強い地域では厳然と継承されている。この現象は前回の研究でみた九州山間部の併列系住宅にも当てはまる住宅発展の法則的現象と言える。

③中廊下型住宅における農家家族の論理は、仮説的に述べた「家族重視という近代の家族観を取り入れながらも、それまでの祖先信仰と家存続の意識」が厳然と継承されている。これは地域の違いに関係なく、また老・若の世代の違いに関係なく継承されている論理である。

昭和40年以降の新築中廊下型の計画者は20～30代の専業および兼業の若い世代であるが、その平面においても仏間および客間的座敷空間の必要性和その空間形態は先代のものを極めて率直に継承しているのである。

そのことが、地域の特徴が現在まで厳然と継承されている内的要因でもある。

### <注>

- 1) 拙著「中廊下型農家住宅の成立とその要因に関する実証的研究(1)」住宅総合研究財団研究年報 No. 18 1991年
- 2) 日本の農家の江戸後期から明治期にかけての平面分類は、全国的に分布がみられるという意味で前座敷系、鍵座敷系、併列系の3つの全国型に分けられる。また地域的に分布がみられる住宅を地域型としているが、前土間系もその1つである。詳細は拙著「旧藩領域からみた農家住宅の地域的相違と歴史的発展過程に関する実証的研究」住宅総合研究財団研究報告書〔No. 8304・8403〕1988.12
- 3) 旧来型とは、中廊下を導入していない住宅型をいう。注1の文献を参照
- 4) 拙著、武士住宅の平面と方位性「藩制と民家」相模書房、1988年
- 5) 民家平面における対角線就寝を指摘したのは青木正夫氏であ

る。

- 6) 玉置伸悟「北陸地方における農家住宅の変容過程に関する研究」住宅総合研究財団研究報告書〔No. 8305・No. 8404・No. 8502〕1992. 6
- 7) 注2の文献を参照
- 8) 注4の文献を参照
- 9) 注2の文献を参照
- 10) 同前
- 11) 注1の文献を参照
- 12) 同前

#### <研究組織>

|    |       |                          |
|----|-------|--------------------------|
| 主査 | 大岡 敏昭 | 熊本県立大学（旧熊本女子大学），生活環境学科教授 |
| 委員 | 原 瑞枝  | 同 助手                     |
| 協力 | 榑原 尚子 | 同 学生（当時）                 |
| 〃  | 中須賀陽子 | 同 学生（当時）                 |
| 〃  | 永吉理美子 | 同 学生（当時）                 |
| 〃  | 植田 絵里 | 同 学生（当時）                 |
| 〃  | 細川 綾子 | 同 学生（当時）                 |